

皆川淇園（1734—1807）

—『淇園答要』と『名疇』の関係について—

Willem Jan Boot

前 置

今からする話は中間報告です。そんなつもりでお受け止めになってください。皆川淇園の研究を始めたのはほぼ3年前ですが、その後、三度淇園のことについて講演しました。講演するたびに自分の見識がまだまだ不十分であるということを自覚せざるを得ませんでした。今日、主に話題にしたいと思っている『淇園答要』という書物については始めて講演しますので、それだけ、新鮮みはあるが、反面に未熟な処も多くあるでしょう。

講演の順番としては先ず、『淇園答要』そのものの紹介から始めます。続けて、淇園が『淇園答要』を書いた動機、淇園の他の書物との関係、他人の書物との関係、という順番で段々と輪を広げていきたいと思います。

『淇園答要』概説

何故、『淇園答要』を読むことに決めたかということ、自分でもはっきり覚えておりませんが、多分、ことの始まりが中村幸彦が「日本思想体系」第47巻の解説で言っていることだったと思います。あそこで、中村先生が次のことを言っています：「もし淇園の学問を平易に一覧せんとすれば晩年になって写本でのみ伝わる『淇園答要』につくべきであろう。」と^①私の注意を引いたのはこの文章であったとすれば、注意を引かれた理由の一つは、「写本でのみ伝わる」という言い方だったでしょう。私はどうしても、生まれつきの文献学者です。「写本」という言葉を聞くと、興奮しだすし、「写本のみ」と言われたら、もう、

止めようがありません。後ほど分かったのですが、「写本のみ」というのは過言でした。抜粋程度には井上哲治郎編『武道叢書』と滝本誠一編『日本経済大典』と『日本経済叢書』に、数ページずつ載せてあります。（ただし、滝本誠一はどういうわけか、題名を変えて『資治答要抄録』と呼んでいます。）

もう一つの、注意が引かれた理由は、私の持論の一つに適ったからです。私は前から、日本の思想史研究の視野を広めるために、思想史を研究する学者が皆、一部でも好いから、未刊の写本を出さなければならないと思っていますが、この『淇園答要』は私の貢献になりうるものの気がしました。

『淇園答要』の内容

さて、『淇園答要』とは一体どんな本ですか。管見では10部ほどの写本で伝わっており、その10部の写本のなかから、8つを拝見して、その中の4つに基づいて、ただいま、テキストを起こして、翻訳しています。

『淇園答要』は寛政4年から11年までの間に成立したと言うことを証明することが可能です。淇園の他の本の後ろに載っている本屋の広告を見れば、『淇園答要』が「未刻」本として載っている広告には『易原』（3巻）が「既刻」とリスト・アップされており、そして『淇園文集』（3巻）が「未刻」となっています。『易原』が全3巻印刷されたのは寛政9年で、このリストで「未刻」となっている『文集』は寛政11年に印刷されました。ですから、リストは寛政11年以前、9年以後のものでなければなりません。もちろん、『淇園答要』が寛政9年以前に成立したことは大いに可能ですが、同じような証拠で、寛政4年以前には『淇園答要』というものはまだなかったことを証明することができるので、4年から11年の間に成立したと決めることができます。つまり、淇園の代表作である『名疇』が上梓してから4ないし11年して、淇園が59ないし66才の間に執筆されたのです。

『淇園答要』の大抵の写本は上中下の3巻に分かれています。東大本は上下の2巻に分けてあります。大抵のは巻ごとに目次を冠しています、この点も

又東大本が例外で、目次なし。枚数は写本だから、ページ番号はないが、自分で数えて見ると大抵は90ないし100丁程度であります。もちろん、写本によって少々食い違いはあります。写本のどれも「自筆」と見なされていませんし、自分が拝見した写本の中で、特に行き届いた、言ってみれば、版下の前段階の稿本也没有ありません。どれも、雑で、何時、誰が写したという識語さえないから、個人が個人用のために写したものとしか考えられません。

テキストを見れば、写本は大同小異というわけで、一応忠実に同じ原本、あるいは同じ系統の原本を写したものであることは言えると思います。違っている所は概ね、仮名遣いとか複写の間違い程度のもんです。過失的な脱字、脱文の箇所もあるし、特に東大本においては校訂のつもりで行われた気がする省略の跡もあります。一方、一つの写本では写した人は意味が通じなくて困惑した跡があれば、全部の写本で同じ場所に困惑した跡があります。これはやはり、同一あるいはほぼ同一の原本を写していたからでしょう。拝見した写本の中で一番丁寧な写本である、国会図書館本では、少しとはいえ、振り仮名を付けたりしたし、本当にお手上げの所に「本ノママ」と記すが、外の本ではこんな校訂の跡は見当たりません。

文体は候文です。これは淇園の著作の中では珍しい。彼は原則、漢文を書く人でした。漢文でなければ、片仮名混じりの漢文下し体で書きました。候文は例外です。

内容は候文らしく手紙です。序文はないが、テキストから判断すれば或る大名に宛てた手紙です。どこの大名か、ということはテキストから判明しないので、この大名を一応架空の人物と位置づけても差し支えないでしょう。

淇園は大名の経験が豊富であったため、自分と文通する大名を想像に難くなかったはずで、1760年前後より亀岡の松平家に仕えて、そこでもらった奥様も大名の身内であつたらしい。1780年代に、膳所の本多家に頼まれて藩校の設立に係わりがありました。三人目で、一番親しかった大名は平戸の松浦静山でした。静山は1791（寛政3／11／15）に入門する運びとなりましたが、それ以

前から付き合っていました。

『淇園答要』の大名は大抵の大名のように、困っています。国の風俗、家来の教育、世間に対して取るべき態度、といったものは皆悩みの種で、アドバイスが欲しい。学問とは何か、何のために必要であろうか、という疑問から出発して、最後の文章で淇園が説くのは「勤勉」であることです。最初の文章は：「学文と申事、無用の物の様に思召候。何の為に学文を致候事、入申候哉、其訳得と申進候様に被仰越、承候^②。」というもので、そして、最後の文章は：「何れにも人身の安楽を思ふハ一身の毒なりと、御心得被成候て、只々御勤勉被成候らへ、御身の御養生にも可相成事に候也^③。」というものです。

ついでに指摘しますが、こういう風にして前後が呼応して合っていることを見れば、伝わっている『淇園答要』はとにかく断片ではなく、首尾一貫しているテキストであることが判ります。巻之上は家来の教育、巻之中は侍のあり方、巻之下は大名のあり方と、きちんとした構造を持っています。

第1巻は24通の手紙からなっています。主なテーマは藩の侍を勉強させるのであったら、何の勉強をさせればよろしいでしょうか、ということです。淇園は、「学文」（彼は「学問」と書かずして、いつも「」学文」を言う癖がある、だから「学文」）の対象は「文学」たるべき、という風に答えます。「歴史」はいかがでしょうかと、大名が訪ねるが、淇園は否定的です。歴史を学べば気が小さくなるだけだ。成功不成功、または、利害関係の角度からしかものを見られなくなるので、功利主義者になってしまうだけでだから、だめだ。

文学さえ学べば、それは狭い意味においての文学、つまり「詩文」だけでもよい。それを習えば、少なくとも「文字を扱う力を付」けることになるから、何とか役に立つのではないかと淇園は切り出す。しかし、間もなく、ただ文字を覚えるだけでは足りない、ということが判明してきます。次の手紙では五経の一つである『詩経』を取り上げます。この手紙を読むと、もはや、「詩三百篇を暗誦したる士は政事の執扱ひにも用に立」つという結論にたどりつきます。なぜ、「士」にとって、『詩経』の三百篇を暗記することがあれだけ重要で

あるか、と言うと、『詩経』を知れば民の感情が分るからです。

これは江戸時代には別に珍しい意見ではありません。他の思想家にもあるし、むしろ普段の考え方です。しかし、淇園がもう一つ、もうちょっと独創的な理由をも申し上げる。「詩」（これは『詩経』の詩であるが）はいくつかの章からなっています。そして、考えは章から章へと続いていき、次の章が前の章の考えを受けている仕掛けです。これは「詩言志」という、詩の定義の真の意味である。「志」とは、「心の行くところ」であるので、「詩」は「心の行くところを言う」ものであります。この「行くところ」を、いずれ着く到着点という意味ではなくて、むしろ、進行形的に「行っているのを」という風に理解すれば、つじつまが合います。淇園は今度、この連続的にどこまでも続く「こころ」、「考え」、「思い」を、天道の一陰一陽と結びつけます。この天道の一陰一陽も周知の通り、永遠に続くものです。「詩」を正しく勉強すれば、物事が続く、ということが判る。物事はきちんと始めがあって終わりがあるという訳ではなく、物事が永遠につづく、途絶えない、途絶えてはならない、ということを学んで分るのは学問の第一歩です。だから、「詩」ほど勉強の出発点に相応しい処はありません。だから、孔子もその門で『詩経』を教育の基礎にしていたし、今でもそれでよい、と。

『詩経』の話しは第一巻の第6通です。その前に、藩の問題を解決するには、改新よりは中興の方がよい。新しい法制を導入するより士の教育に賭けた方がよいと説いてきているのです。『詩経』の話しは、つまり、その士の教育の内容は何にすればよいか、という質問への答えです。『詩経』のあとに、禮・樂・『書経』・『春秋』・『周易』・『論語』・『孟子』のことを紹介し、つまり、『詩経』以外に学問の対象に成るべき經典の説明をするわけです。その後、儒教の競争相手である思想体制を、「老莊の書」、「佛家の説」、「禅学」、「心学家」の順で取り上げてその不当なところを摘発します。残りの手紙は教育の実質的な問題について発言します。文章の稽古、詩作の稽古の事も取り上げるし、学校の設立のことも論じます。これらの手紙の中に、「教ゆるの八難

の事」という一章もあるが、これは藩に新しく藩校を立てて一切の侍に入校して勉強してもらいたいと思えば、どういう問題にぶつかるか、ということをはっきり示すものであります。申し上げたように、淇園は膳所の大名に頼まれて膳所の藩校の設立に携わっていたので、経験者でありました。

『淇園答要』の中巻は四十一通の手紙からなっています。始めの三通は「士」の在り方を論じますが、残りの手紙は親孝行の「孝」、兄弟同士の「悌」、君臣の「忠」等の徳目を一々論じます。合計して、三十七の徳目^④を続々と取り上げるのです。「恕」を定義する第七通から、淇園は文通している建前をまるっきり忘れていてようで、「お尋ね仰せ越され承り候」の前書きを書き落として^⑤、いきなり定義から説いていきます。

理由は多分、定義となったら淇園は心をうばわれてしまうからでしょう。彼はいくつもの辞典を作ったし、彼の所謂「開物学」も、言ってみれば、単語をなるべく客観的な方法でもって定義する術の外にありません。『淇園答要』の中巻も、こういう訳で、大方、定義ですが、その中から二三の例を挙げましょう。

＊『淇園答要』、中巻、第九章、信之事：

「信といふは、其行の後にもたがわざるべき事を人に頼母敷思ひ、心当てにせらるゝを信といふ也。我より言ひし詞をちかへざれ共、人が吞込て信せざれば、信とはいはず。人より是を信して後に、信と称する事を得べし。」

＊『淇園答要』、中巻、第廿九章、「良之事」：

「良とは物の末の遂る性根の備はりて見ゆるを良といふ。良馬は是非千里を行遂る馬也。良薬は是非其病を瘳す薬なり。良人ハ末の遂けて偕老となるべき夫を称する事なり」

＊『淇園答要』中巻、第卅五章、「誠之事」：

「誠と言ふ事は其行の久敷すれ共、渝（かはら）ざる〈二〉よりて其中のくるわぬ所あるを推しいふの名なり。四時の寒暑の行ハるゝに、或は先達或ハ後れて、くるひたる様なれども、始終の所寒は寒となり暑は暑となりて差ふ

事なきを称して、誠は天の道なりといへり。」

言っておきますが、これは淇園の定義としてはきわめて穏やかで理解しやすいものであります。

第3巻は32通です。テーマは大名の「心得」、大名の「心術」であります。「心得」と「心術」はそれぞれ第1と第2通の題名です。最後の手紙の題は「諸侯の遊興の事」であります。その内容を略して申しますと、遊興は油断禁物、下のものが大名が遊んでいるのを見れば下のものも怠けてきます。この手紙は先に引用した、「勉強した方がよい」という文章で締めくくります。それ以前の手紙では例えば、協力者の選び方のこと、「賢者」の雇い方のこと、自分の威光がどう保てるかのこと、刑罰と礼（儀作法）のこと、など、東アジアの為政者が普段に気にすべきことを取り上げています。

『淇園答要』と『名疇』の関係

これで一応、『淇園答要』とは、どういう類の本であるか、内容はどのようなものであるか、分かって来たでしょう。しかし、多分、それと同時に、この本はいったいどこが面白いのか、という疑問も湧いてきたでしょう。世の中で読むべき本は多くあるに、なぜこの本をも必読書のリストに載せるのでしょうか。特に、その時代においてすでに忘れられて上梓にも至らなくて、自筆本も伝わっていない本だから、眠ったままでもよいのではないかと、思われる方は多分いると思います。反論はもちろん、あります。なかったら、私もこの研究を諦めたでしょう。一つ、言えるのは『淇園答要』の題名が「未刻・三巻」として、淇園の他の書と一緒に広告の欄に予告されているので、『答要』を印刷する予定があったことは確かです。『答要』は、どこそこの、反古にされた写本ではありませんでした。もう一つの理由は、『淇園答要』が淇園の思想、彼の思想的営みを理解するための重要な文献であることです。

淇園は現在、名が知られているとすればそれは、その言語学的研究のためであるでしょう。特に、その辞典と、そして、なるほど、その難解な「開物学」

のために記憶されています。辞典の一部が今、復刻本^⑥として出ているし、文集も同じく復刻本^⑦として入手出来ます。「開物学」についてはいくつかの論文^⑧があるものの、本の資料はまだ全部、版本と写本のままです。「日本思想体系」に収録されている『問学挙要』は淇園が「開物学」を開発する以前の本です。しかし、「開物学」を開発した以後に出た、淇園の名作とも言うべき『名疇』は、ないと言ってよいほど研究は少ないし、抜粋程度にしか活字になっていません。『淇園答要』も同じ状況です。なお、淇園の著作の中で儒教の教義を論ずる物は案外に少ない。この両書は、むしろ、例外の方です。だから、この両書をその相互関係において考える理由が十分にあります。

すでに見たように、『淇園答要』は『名疇』より後の著作であることは確かだから、淇園が『答要』のなかで『名疇』に言及することがありえます。現に、『答要』のなかでは『名疇』を参照して欲しいと、淇園が言う処は3カ所あります^⑨。勉強不足ですが、どれも正確に『名疇』のどこを指しているか、まだ分かりません。

外に、『淇園答要』と『名疇』の関係を考慮する上、手がかりになるのは、『答要』の第2巻です。申し上げたように、第2巻は大方徳目の定義に埋まっているが、実は『名疇』は徳目の定義ばかりからなっている著作です。『名疇』は6巻で、合計して58個の徳目を取り上げます。これは『淇園答要』の37個より多いですが、『淇園答要』にあるものは皆、『名疇』にもあるし、そして、取り上げられる順番は少々異なるものの、一致しています。というわけで、『淇園答要』を執筆する動機の一つは『名疇』の宣伝にあったことは言えると思います。

なぜ、『名疇』を宣伝する必要があったかという点、本を見れば判ると思います。6巻、300丁弱の、難い漢文が書いてある大きい本です。印刷は安く付いたはずはないし、結構な値段で打っていたはずです。嵩が高いことは、多分、出版の遅れた理由でもあったでしょう。自序は天明4年のもののなのに、出版されたのはやっと、4年その後の天明8年であります。参考書では天明4年に印

刷されたという記事にたまたま遇うが、これは間違いです。序文の日付が天明4年なので、早合点して印刷も、同じ年に行われただろうと思ったでしょう。しかし、天明8年より溯る本は存在しないし、存在したと推測する根拠はありません。

『名疇』の出版費用を、松浦静山（1760－1841）が受け持ちました。印刷そのものは京都ではなくて、平戸で行われたかどうか、言い切れませんが、静山が必要な予算を付けたことは確かな様です。天明8年刊の『名疇』の各巻の始めに二つの印が印刷されています。（印刷されているというのと、後ほど判子を押したような印ではなくて、元々版本に彫ってあった印である、という意味です。）一つは「平戸藩蔵版」と言い、もう一つは「楽歳堂図書記」と言います^⑩。「楽歳堂」は静山の号です。つまり、1788年には静山がすでに淇園のパトロンになっていたのであります。だから、両者の付き合いは1791年静山が淇園の学校に「入門」するときよりは、少なくとも4・5年古かったはずです。静山が1775（安永4）年、藩主になってから藩の改革の一貫として平戸において藩校を設立して所謂「平戸版」の刊行に着手した^⑪ことを考え合わせると面白いパターンの輪郭が現れてきます。しかし、本を出してもらえない儒者と本を出版したがる藩主がどういう風に巡り会ったか、資料が語りません。

もう一つ、ちょっと意外なことは、『名疇』の二つの自序の外に、他人の寄せた序文はない、ということです。これをどう評価すればよいか、よく分かりませんが、淇園のような羽振りがあった人が、京都では幾人でも、序を書いてくれる人を募ることが出来たはずです。募ろうとしなかったか、あるいは「いや、この本は、ちょっと」と、断られたのでしょうか。関係する文献はないから、これも憶測の領域です。

構造から言うと『名疇』は辞典のように見えるが、『太史公助字法』、『左伝助字法』、『詩経助字法』、『助字解』、『助字詳解』、『虚字解』、『虚字詳解』、『実字解』、『実字詳解』と違って、『名疇』は中国語古典籍の勉学の参考書のつもりで作ったものではなく、前述したように「儒教の教義」、儒教の倫理を解釈

する意図で作った書物です。だから、辞書類とは違う読者層を開拓していかなければなりません。淇園にとっても新しいジャンルでした。所詮、当時の淇園は独創的な思想家というよりは、むしろ、立派な漢文学者として知られていました。

『名疇』を買って読んでみると、読者は、見出しごとにまず、不可解な定義にぶつかります。註に二三の例¹²を挙げますが、どれだけ中国語が上手であってもこれが読めたはずはありません。これらの定義は淇園が自慢にしていた「開物学」の産物であります。

因みに申しませんが、淇園の一番大きい辞典である『虚字詳解』は、本人が亡くなった後、巻の1から15までが印刷され、それに次ぐ巻は写本のままです。印刷した分の見出しと写本の分の見出しとを比較すれば、すぐ気が付くのは印刷した方には「開物学」の跡はないのに、写本のままの分にはその跡が濃厚に残っていることです。正確に言うと、写本の巻16と17はまだ、印刷した分が変わりませんが、巻の順次番号が書き入れていない、自分で数えて、巻18と巻19¹³は「開物学」による記入が見出し毎に現れます¹⁴。たとえば、卷之三にある「言」の見出しを見れば、「心ノ内ニ、モッテ居ルコトヲ、向フノ聞クトコロノ、モヤフニシテ云出シ、辞ニソレヲ、スユルヲ、(言)ト云」¹⁵ということが書いてあります。複雑だとはいえ、不可解ではありません。しかし、写本の方で「近」の解説を見れば、「商 物 格 内開合 象 乾象尚巽 器 艮象尚坤 ソノキヨフガコヲ」¹⁶ラヘクルニアタルヨフスヲ内ニアハセナシテ云フニナルコト チカツクノ寸ハ開標乾尚巽形トナル斗リ也」¹⁷ということが書いてあります。一般の読者だったらこれをもう、不可解とあきらめて、無視したはずです。

淇園はこの「開物学」を非常に自慢していたのですが、誰にでもすぐ分かるものではないということを自分でも悟ったらしい。『淇園答要』にはこんな無理な定義を入れはしませんし、一度だけ、「開物学」に言及すると、次のことを言います：

「されは易學ハ学者至要の事と可被思召候。其詳なる事に至候ては、野者著し置候『易經釋解』、『易原』并『易學開物』等御覽之上、御尋被仰越候ハ、相分り可申候哉。併し精微の旨多く候故、所詮面命にあらず候ては、明白に相分候事不出来候半と存候事ニ御座候」¹⁸

この「面会して説明しなければならない」「精微な旨」の下に潜んでいるのは今ご覧になったような不可解な提議の底なし沼であります。

仮説とはいえ、一応、『名疇』は厄介な本であったということにしておきましょう。厚くて、高くて、むつかしくて、漢文体で、本屋が簡単には捌けなかったでしょう。淇園もこれは普段の読者にとって余りにも近寄りにくいことを悟たらしく、別途でもって自分の思想と自分の存在をアピールしようとした。この「別途」は『淇園答要』であります。

『淇園答要』と徂徠

どうして候文の手紙の形を装って、自分の本の宣伝をすることが出来るという発想が生じたかという、それは『徂徠先生答問書』という先例があったからでしょう。淇園がその本を知らなかったはずはありません。荻生徂徠は、18世紀の半ば頃に京都で重要な存在でありました。京都の儒者が、徂徠派と反徂徠派とに分離して、やがて主流が反徂徠派に傾いてしまいました。淇園もこの主流派に属していたので、徂徠に対して疑心を抱いて彼の影響に反撥しました。しかし、「世間体」というものがあったとか、徂徠に対する批判は、はっきりには言いません。この点、弟の富士谷成章（1738－1797）とは大分違いました。成章が『非南流別志』という、徂徠の書いた『南流別志』という書を批判する本までも出します¹⁹が、淇園はあんなことはしません。しかし、発言が控えめであるとはいえ、完全に批判はないわけでもありません。一例は淇園が31才の年（明和元年；1764）で書いた「論学」という論文です。徂徠の名は出さないが、普段、これは徂徠の批判として読まれます。

「今之人之於學也、好先趨於高、曰道舉大者則小者從焉、詰其所謂大者、則特虛文而已、夫仁義者、道之大者也故其物之所包至廣矣、譬猶輪轅輻轂具而後有車之名也、輪轅輻轂未具而曰此有車者吾不信矣、聞而說之、傳而執之者、徒誦古之書、而口古之言者耳、此豈古之人哉、(中略)既積其小者、則大者從焉、(中略)是故未能積其小、而曰我能舉其大者、亦猶以畫誣真之比爾、(中略)是故、學尚先務其小者、小者既積則大者自至焉、於是舉其大者則小者與屬焉。」^{②)}

これは徂徠批判であります。何故かという、徂徠は『弁道』で、「先王之道、其の大なる者を立つれば、小き者自ら至る」と言いました。^{②)} 淇園の主張はその正反対であります。おまけに、「古い本を暗記して、古い詞だけを口にしても、それで古の人になったわけではない」と言っているのはどうしても、古文辞学を諷刺したものと思えません。「知る人ぞ知る」というような批判ではありますが、知る人は多かつたし、世間体が悪くてみっともない喧嘩を避けられました。

『淇園答要』と『徂徠先生答問書』

先に言ったように、こんな淇園は『徂徠先生答問書』を知らなかったことは考えられません。両書を比較すると瓜二つ。題名までも『徂徠先生答問書』をモデルにしたことに違いはなさそうです。他の類似点はたとえば、文体は『淇園答要』も『徂徠先生答問書』も同じ候文で、しかも、文章は手紙であることです。巻数も共に3巻で、丁数もほぼ同じものです。どこが違うかという、『徂徠先生答問書』は侍に当てている手紙なのに、『淇園答要』は大名に宛てている書簡からなっています。^{②)} なお、平石直昭先生が『徂徠先生答問書』に関して論証したこと^{②)}と同じように、『淇園答要』も架空人物に当てた書簡と見なせば妥当でしょう。

『徂徠先生答問書』が宣伝のつもりで書かれていることが同じく、平石先生に論じられているのですが、論証を待たずして『答問書』の一番最後のページを覗ただけでも分ります。そこに「(前略) 愚老申条如何様にも道理有之様に思召し、愚老手筋に従ひ御学候ても御覧可被成思召候はゞ弁道弁名本屋に申付書写為致差越可申候。左も無御座候はゞ争の端を長し、不入事と存候。」^④と書いてあります。つまり、読者へのメッセージ：「『答問書』が気に入ったとすれば、続けて『弁道』と『弁名』をお読みなさい。本屋で写してもらうことができるよ」、と言っています。同時に、『弁道』も『弁名』もまだ印刷されていなかったのです。両書はともに元文5（1740）年、つまり徂徠の死後12年して、やっと出版されました。

こういう風に『淇園答要』と『徂徠先生答問書』は似ている処は多い。しかし、似ない処もあります。徂徠は例の如く向こう意気が強くて、繰り返し宋儒を貶します。彼らの文章が下手で、彼らの思想は仏教と変わらなく、彼らは自分の思想を五経に託している、と批判します。しかし、それでも『徂徠先生答問書』が案外に抽象的な本です。仁の徳を説いて、為政者が「民の父母」でなければならないと言うが、どういう風にして父母であり得るかとは余り立ち入りません。「道」は先王の道であり天地自然の道ではないと大声で言うが、その先王の道を現代の日本にどう応用できるかという、明確な返事はありません。「日雇いを止めよう、侍は土着へ」という二つのキャッチフレーズ程度です。読書のお勧め、という気がするところが多くあります。

為政者のために儒教の応用を説明しているという構えかたにおいては徂徠も淇園も変わらないが、淇園の方が実は実用的です。淇園は徂徠を始めとして、他の儒者を貶したりしません。誰かを貶しているとすれば、むしろ、大名の家臣であります。藩の中興、家来の教育、学校の設け方、大名の振る舞いなどについて言うことはかなり具体的で、参考になるようなアドバイスです。その間に、儒教の主な聖典や主な徳目を説明します。その説明は自我流の説明ではあるが、調子が控えめで、徂徠のように胸を叩いて「俺を聞け」という気持ちは

ありません。

淇園が徂徠を非難しないから、内容のレベルでは『淇園答要』を『徂徠先生答問書』の反論として読むことはなかなか簡単ではありません。しかし、稍はつきりした例を一つだけご紹介しましょう。これは「仁」に関する両氏の説です。徂徠が『徂徠先生答問書』の中で何より強調してと説くものは「仁」という徳目であります。この「仁」は君子の徳、為政者の徳であると主張して、それは「愛」とか「慈悲」とか、そういうたわいないものではなく「民の父母」である徳目であります。『答問書』の第一の手紙にそれをはつきり断っておきます。「君子之道を申候はば仁之外に又肝要なる儀無御座候。」淇園は違います。中巻で「仁」を定義するところで、彼は「前儒」の説も「近世の儒者」の説も取り上げて、他の所で余りその類を見ないやり方で避難します。

「仁徳の事前に已〔スデ〕に辨じ候得ども、前儒の説とは大相違の様に有之故、其訳略申進候様被仰越承候。前儒は論語に仁者愛人と言國語に言仁必及人又仁文之愛也といふに據て、仁ハ心之徳、愛之理也と言ふ解有之候。然れとも人の字己〔オノレ〕に對したる字にて己れ骨惜ミをせずして人の事をその儘に見捨難く思ひて因て勉強して其為に事に趣くを仁と言たるものに御座候を肝要とする所の人の字を棄て愛の字はかりにて仁の解といたし候事以の外の誤りにて御座候。」

申すまでもなくこれは、朱子の『四書章句集註』内『孟子』の一節目の註からの引用です。

「其上、仁義といふは人たるの道にて、人々ニその面かけの無事にては人の道とは申さぬ事なるを、別に一物を引出して愛とのミいふ事、甚た疎なる見解也。人の道といふ辞のあるによりて、人生の常にかへりて見候得は、只人はかり相輔相養ふの事を以て道といたして、禽獸の道とは唯是を以て

其異とする事なれハ、仁義の道、其内にある事明白に御座候。易の繫辭傳ニ一陰一陽之謂道、繼之者善、成之者性、仁者見之謂之仁、智者見之謂之智、百姓日用而不知と言へり。是は彼相輔け相養の内に仁義の道のある事なれとも、百姓は是を用て自ら仁義なる事を不知といふ義なり。是に據りて見候得は、愛の理、心の徳といふは、前儒の説の謬解、甚た明らかに相分れ可申と存候。其外、近世、仁者長人安民の徳といへる説は、禮記の曲礼の安民の文字と易の文言體仁足以長人と申文字をは取合せて解と為したる者にて、其義殊更粗造なる事也。其故は體仁足以長人とは、猶團飯を三ツ食へは、足以充餓といふと同じ語勢なり。足以長人、足以充餓とは、此處の用に間に合ふといふ事なるを、團飯三ツをは充餓の物なりと直におし極めていひては、四ツより以上は餓に充るにたらぬ物となりて、聞へぬ事になり候。團飯ハ別に團飯の解有へく、仁ハ別に仁の解あるへきを、其用を直に其解としたる事、尤粗略にて、文理の当りを失へり。」

これは明々白々に徂徠を非難した文章ですが、御覧のようにその名前が出てきません。そして、これでも、もう行き過ぎたのではないかと、心配しているかのように、淇園が最後の文章にお詫びを言います。

「仁義は人の道なるを、前儒より如此に解誤りたる事は、甚歎ケ敷事と被存候。故に不得已此弁に及ふ事に、て敢て前儒の非を挙るニはあらず」と。²⁵

結 論

結論に行きましょう。先ず『淇園答要』という、近世の思想史の研究において殆ど使われたことのない、新しい資料をご紹介しましたが、これがおももの狙いでした。言ってみれば自己宣伝。

次に、私の話の中に再々言及したのは「定義」という物です。話しの中では

ちょっとふざけていましたが、実は定義が重要な問題であります。淇園は普通の定義の仕方に対して不満を抱いていました。任意的で主観的で、大して役に立たない、と。彼が発展する「開物」は先ず、先に言ったように、単語の客観的な定義を得る方法でありました。なお、淇園が定義したがっていたのは中国語、しかも古典中国語の単語でありました。彼が思うにはその単語は、聖人が作った以上、「物（ぶつ）」、つまり、がっちりした、虚ではなく実である知識を包含するのだ、と。この「物」を開くのに淇園は『易経』を使用しました。客観的な知識を得るのなら、『易経』しか東アジアの伝統が提供しない手段であるからであります。その点、『易経』がヨーロッパの数学と論理学に相当する役割を演じたと言えると思います。『名疇』はこの研究プロジェクトの成果をまとめたものであり、『淇園答要』も、この延長線で読むべきだと思います。淇園の定義論は、出発点が基本的に間違っていたので失敗に終わりましたが、見事な失敗であったので、研究に値します。

もう一つのテーマは古典中国語と日本語の役割です。今の話で実例を以て示したとおり、江戸時代の儒者が中国語と日本語を両方操っていました。これは周知の事実です。しかし、その役割分担のことについて、まだまだ充分には考えてきていません。「同じ思想家だから日本語であれ漢語であれ、同じ事を言っている筈だろう、だから、一番分かりやすい、日本語の文献を読みましょう。」大抵にはこう考えているようですが、これはあまりにも安易的な考え方です。江戸時代の知識人が中国語で書く文章は他の知識人、つまり、同僚の儒者のために書く文章でした。この文章こそ、腕の見せ所であって、この文章によって同僚の儒者に評価されたかった。日本語で書く文章は素人のために書く文章でありました。内容は、だから、啓蒙的であるか、あるいは、『淇園答要』と『徂徠先生答問書』の場合のように、自己宣伝のつもりで書きました。その上、日本語で書くといっても片仮名交じりと平仮名交じり、漢文の書き下し体と擬古文と和文体と候文のどれかを選択しなければなりませんでした。選択基準は必ずしも明快ではないが、どれを撰ぶかによって文章の位置付け、文章の格調、

そして、読者に期待が違ってきたことは確かです。このことに対して、もと周到な注意を払わなければなりません。

徂徠が「学則」において主張することの記憶を呼び起こすまでもなく、江戸時代の儒者は中国語（漢語）のばあい、白文棒読みを前提にしていたが、今の日本では漢文と和文の区別が、読み下しの柔らかい布団に覆われて見えなくなりがちです。今の日本では、考えを表現するには口語体のみ、言ってみればピアノの一つの鍵盤だけで我慢しなければなりません。しかし、当時の人にとっては、言葉はチャーチ・オルガンのようなものでした。『淇園答要』と『名嶠』、『徂徠先生答問書』と『弁明』の関係を考えると、オルガンの三つの鍵盤といくつもの音栓に亘って繰り広げられた、研究事業であり出版戦略でした。淇園も徂徠も鳴らそうと思った曲に応じて一番ふさわしい鍵盤を選んだはずだから、その選択基準は研究者の注意に値します。

〔註〕

- ①『近世後期儒家集』、『日本思想体系』第47巻、p.529。
- ②『淇園答要』上巻、第一章、「學問は何之爲に致し候訳」。国会図書館本に基づく。句読点、濁点などは著者に依る。以下同様。
- ③『淇園答要』下巻、第卅二章、「諸侯の遊興の事」。
- ④『名嶠』との比較の便を考えてリストアップする。目次による。括弧内の番号は中巻の中の章の番号です。（四）孝之事、（五）父祖之惡に従ふ問敷事、（六）悌之事、（七）忠之事、（八）恕之事、（九）信之事、（十）敬之事、（十一）恭之事、（十二）儉之事、（十三）謙之事、（十四）遜之事、（十五）讓之事、（十六）慎之事、（十七）敏之事、（十八）慈之事、（十九）惠之事、（二十）智之事、（廿一）勇之事、（廿二）仁之事、（廿三）義之事、（廿四）寛之事、（廿五）温之事、（廿六）直之事、（廿七）正之事、（廿八）剛之事、（廿九）良之事、（三十）貞之事、（卅一）廉之事、（卅二）文之事、（卅三）武之事、（卅四）善之事、（卅五）誠之事、（卅六）道之事、（卅七）德之事、（卅八）元之事、（卅九）和之事、（四十）性之事、（四十一）命之事。
- ⑤22章、「仁のこと」だけは例外。
- ⑥『虚字詳解』（吉川幸次郎〔ほか〕編、『漢語文典叢書』第4巻所収）；『実字解』3巻、『実字解』2編（『同』第5巻所収）；『太史公助字法』、『左伝助字法』、『詩経助字法』（『同』第6巻所収）、東京：汲古書院、1979-1980。
- ⑦『淇園詩文集』、『近世儒家文集集成』第9巻、高橋博巳編集・解説、東京：ペリカン社、1986。
- ⑧主に参考にしたのは次の文献です。
 - 戸川芳郎著、『虚字詳解』（『漢語文典叢書』第4巻所収）の解題（1980）；

- 加地伸行 [ほか] 著、『皆川淇園・大田錦城』、東京：明德出版社、1986；
 - 高橋博巳、『淇園詩文集』（『近世儒家文集集成』第9巻）の解説（1986）；
 - 野口武彦、「開物と声象—皆川淇園の「怪物学」解説のこころみ」、『江戸文学』1（2）（1990）、p.2-26（野口武彦著、『江戸思想史の地形』、東京：ベリカン社、1993年所収）；
 - 浜田秀、『「開物学」の発想について—『均繇三十六則』を中心に』、『国文論叢』20（1993）、p.1-14；
 - 浜田秀、『皆川淇園論（一）』、『山辺道』44（2000）、p.1-15；「皆川淇園論（二）—「九籀」概念を中心に』、『山辺道』46（2002）、p.25-51。
- ⑨＊『「孔子作春秋而乱臣賊子懼」 と言へるものなり。此も我尚『名疇』の中に詳に載たる故に省略申候。』（『淇園答要』上巻、第十章、「春秋の事」）
- ＊「当今に有る所の心學家といふものは、如何のものに候哉、御尋被仰越候。是ハ乃ち三教一致の説にて、その誤り前條に申進候通の事に御座候。委敷事ハ名疇の内に弁し置候。御覽可被成候。」（『淇園答要』上巻、第十七章、「心學家の事」）
- ＊「扱右の教方は野夫参り候に及不申候。此度拙者『名疇』と申書致刊出申候、右之書を以て御考被成候ハ、自然に相分り可申候。大略右之通ニ御座候。精敷事は面上ならでは難シ候。」（『淇園答要』上巻、第廿三章、「學校の設け方の事」）
- ⑩渡辺守邦他編、『新編蔵書印譜』、「日本書誌学大系第79巻」、東京：青裳堂書店、2001、p.451を参照。
- ⑪何年に藩版の刊行活動を開始したかということについて、参考書は不正確だが、安永9（1780）年（以後）であつたらしい。例えば、国立国会図書館著、『人と蔵書と蔵印—国立国会図書館所蔵本から』（東京：雄松堂出版、2002）p.202を参照。
- ⑫『名疇』より：
- 仁：仁者、自克其身所或違、而以止之於其德於人之処之名也、其疇象、為自用〈克〉其実体、〈其〉身）以紀〈止〉之於其道之紀〈德於人〉之処）之類也。
- 智：智者、古亦作知、道之所当従、而人或難之睹者、心通悟其当然者之名也、其疇象、為実〈心〉能紀〈能通〉悟）於道之所道〈道之所〉当従）之実〈当然〉者）之類也。
- 勇：勇者、於其心之所或止、而鋭身以進越焉之名也、其疇象、為於実〈心〉之所紀〈所或〉止）、而体〈鋭〉身）以取道〈進越〉之類也。
- ⑬『漢語文典叢書』第4巻、p.371-428。
- ⑭なお、戸川芳郎が筑波大学所蔵の写本によって翻刻した分も「開物学」の影響がはっきりしており、フォーマットは巻き18・19と同じだ。（『漢語文典叢書』第4巻、p.491-578）
- ⑮『虚字詳解』巻之三、49ウ；『漢語文典叢書』第4巻、p.84。
- ⑯「ヲ」は「チ」の誤りであろう。
- ⑰『漢語文典叢書』第4巻、p.413。
- ⑱『淇園答要』上巻、11章、「周易の事」。
- ⑲『南流別志』は元文1年に始めて印刷された。成章の『非南流別志』は天明6年序、寛政7年刊である。江村北海著、『授業編』の最後の章には北海が徂徠の書と成章の批判をやや詳しく書く。
- ⑳『淇園文集』1：26ウ-27ウ。
- ㉑『弁道』11（『荻生徂徠』、『日本思想体系』第36巻、p.22）。同じ指摘は前掲書『淇園詩文集』の高橋博巳著、「解題」、p.6、にもある。
- ㉒しかし、徂徠が『答問書』の三番目の手紙で家来と大名の区別を比定する下りがあります：「然れ

ば臣たるものの道は。君たる道を不存候而は。了簡皆違ひ申候事明らかに御座そうろう。(中略) 此故に士大夫の事を君子と申候。君子と申候は。(中略) 君徳ある男子と申事にて候。」(島田虔次編輯、『荻生徂徠全集』第1巻、東京：みすず書房、1973、p.430；『徂徠先生答問書』上7オーウ)。

②③平石直昭、『『徂徠先生答問書』考—経典注釈と政策提言の間』、『社会科学研究』 45 (1993)、p.217-237。

②④『荻生徂徠全集』第1巻、p.486；『徂徠先生答問書』下、34ウ。

②⑤『淇園答要』中巻、第廿二章、「仁之事」。